師匠のグッド・バイ

【めちゃくちゃ】あのれーれんあらたたの相談所で裏メニュー頼んだら凄かったw【高い】

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18521259

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, ネトリプレイ, 観客有りプレイ, ♡喘ぎ, モ腐サイコ小説50users入り

今回２ページあるのでご注意ください。ストーカー表現注意。ネトリプレイ、観客有りのプレイが有ります。お好きな方はお楽しみください。
絵文字やコメント、ブクマやいいねいつもありがとうございます。めっちゃ励みになっております。マシュマロもありがとうございます……！

Table of Contents

【めちゃくちゃ】あのれーれんあらたたの相談所で裏メニュー頼んだら凄かったw【高い】

【めちゃくちゃ】あのれーれんあらたたの相談所で裏メニュー頼んだら凄かったw【高い】

1 アンチファン
立った？

2 名無しのスプラッシュ
2ゲト

3 名無しのスプラッシュ
本日のホモスレはこちらですか？

4 名無しのスプラッシュ
^o^)┐

5 名無しのスプラッシュ
＞＞4 お帰りください

6 アンチファン
おまえら霊幻新隆って覚えてる？

7 名無しのスプラッシュ
誰だっけ　聞いたことある

8 名無しのスプラッシュ
ソルトスプラッシュじゃん

9 名無しのスプラッシュ
あー、あの本物かもしれない霊感詐欺師か

10 名無しのスプラッシュ
＞＞9 それだとただの詐欺師な件

11 アンチファン
そいつが『裏メニュー』で売春やってるって噂があってさ

12 名無しのスプラッシュ
ほう

13 名無しのスプラッシュ
┌(┌^o^)┐

14 アンチファン
＞＞13 お帰りください
で、確かめてきたんだわ

マジだった

15 名無しのスプラッシュ
えっ

16 名無しのスプラッシュ
えっ

17 アンチファン
ある合言葉を言うと裏メニューを出してくれんだけど、まず、それがめちゃくちゃ高い。1番安くても30万、1番高いコースは200万

２００万　払　っ　て　き　たw

18 名無しのスプラッシュ
おお……

19 名無しのスプラッシュ
＞＞1 本番アリ？

20 アンチファン
＞＞19 アリ

21 名無しのスプラッシュ
パンツ脱いだから早く

22 名無しのスプラッシュ
＞＞21 風邪ひいとけ

うそ、毛布あげる♡

23 名無しのスプラッシュ
＞＞22 thx

24 アンチファン
昼ごろに待ち合わせして、デートしてからホテルって流れだった。
駅に行ったらヤクザが居てビビった。たぶん用心棒だと思う。で、
ヤクザの車で金を渡して新隆が数えたんだけど、

めっちゃいい匂いして、俺はその時点でヤバかった

25 名無しのスプラッシュ
＞＞1 即落ちすぎるw
イッチは男もイケる口？

26 アンチファン

＞＞25 新隆に会うまでヘテロだと思ってた。いまだに新隆以外の男は抱ける気がしない

27 名無しのスプラッシュ
なんかイッチ……まぁいいや、続けて

28 アンチファン
デートコースは新隆のお任せにしてたから、駅前のラウンドワンで遊んだ。

めちゃくちゃ楽しかった……

29 名無しのスプラッシュ
イッチがもう手遅れな件について

30 アンチファン
＞＞29 新隆めっちゃ話上手いし、俺を誘う目とかボディータッチとか、とにかくエロいんだよ！いい匂いするし！

31 名無しのスプラッシュ
（あっ）

32 名無しのスプラッシュ
いいぞ続けろ、いい狂気だ

33 アンチファン
夕飯も新隆おススメのラーメン屋で食った。美味かったけど、楽しかった方が覚えてる

34 名無しのスプラッシュ
（あわれな……

35 アンチファン

あ、ホテル代は俺持ちで別な。ホ別ってやつ。予約してなかったから、新隆行きつけのラブホに行くしかなくて、めちゃくちゃ後悔した。いいホテル連れて行って喜ぶ顔が見たかった……

36 名無しのスプラッシュ
……。

37 名無しのスプラッシュ
釣りか？

38 アンチファン
？なんで釣りだと思われてんだよ
まぁいいや。続けるぞ。
ホテルに着いたら 2 人で風呂に入った。シャワー浴びながら、新隆は俺に告白してきた。一目惚れだって。マジかぁ～って思ったけど、俺ももうだいぶ好きになってたし、イチャイチャしながら俺も好きだよって言ったら、すごく喜んでた。
胸がキューンってしたよ……

39 名無しのスプラッシュ
＞＞1 一応きくけど、恋人プレイとかオプションつけてねぇよな？

40 アンチファン
＞＞39 つけてるけど、俺たち本気だから

41 名無しのスプラッシュ
（アカンやつやこれ）

42 アンチファン
それからキスしたんだけど、めちゃくちゃ気持ちよくて。俺たち身体の相性が良かったみたいなんだよな

43 名無しのスプラッシュ
イッチよよく聞け、それは幻想だ。200万円分の夢を見せてくれてる

だけなんだよ

44 アンチファン
フェラもめちゃくちゃ上手くて
なんつーの？愛情がこもってるっていうか

45 名無しのスプラッシュ
今北産業

46 名無しのスプラッシュ
＞＞45
都市伝説に突撃
かと思ったら
ガチ恋ヤンデレ化

47 アンチファン
騎乗位もやってもらったんだけど、比喩でなく腰砕けになった。
俺、めっちゃくちゃ新隆と相性良かった

48 名無しのスプラッシュ
ｶﾞｸｶﾞｸ(ﾟдﾟlll)ﾌﾞﾙﾌﾞﾙ

49 アンチファン
そんで、肝心の裏メニューの出し方だけど

教えねーよﾊﾞｰｶ

新隆は俺のものだ

－－－このスレッドは通報され、凍結されました－－－

「ねぇエクボ。師匠の様子がおかしいんだ。呪われても取り憑かれてもいないのに、ずっとビクビクしてるっていうか」
「あ？……まあ、言われてみれば」
ばっ、と後ろを振り向いたり、ここ最近の霊幻の様子は、おかしいといえばおかしかった。
「僕や芹沢さんがきいても何も無いって言うし……ねぇエクボ、それとなく師匠についていてあげてくれないかな」
「……ま、シゲオの頼みなら、きいてやるよ」
最近、俺は相談所に行くのをサボっていた。
とにかく面白く無かったからだ。
あれから俺は何度も霊幻を２００万で呼び出し、あいつの時間を買っていた。
だが、相談所に行けば。
給料を貰ってるやつらが、俺が金払って向けて貰ってる蕩けた愛情深い視線を、これでもかと浴びているのだ。
モブも芹沢もトメも、ズルい。
なんでアイツらは霊幻の愛情を無料で浴びられるんだ？俺様はこんなに苦労しないとダメなのに。
霊幻も霊幻だ。なんで俺にはいつも厳しいんだよ。悪霊だからか。くそっ。
そんな感じで俺は拗ねていた。が、拗ねているのを知られるのも癪で、相談所にはワザと行っていなかったのだ。

しかし付き合いの長さか、シゲオの勘は当たるもので。

「……アンタは出禁にしたはずだが」

芹沢もモブもいない時を見計らって、ソイツは相談所に来た。

「なぁ新隆っ……なんでメールも電話も返事しねぇんだよっ、俺、し、心配で……っ」

「お前、俺の裏稼業のことをネットに晒しただろ」
「……！な、なんでバレて……！」
「こちとらそんな時のために免許証まで押さえてあんだよ。覚悟しとけよ、あの人たちがお前に報復しに来るから」
冷たい霊幻の目がソイツを居すくませる。
「なんだよ……ちょっと自慢したくなっただけなんだって……嘘だろ、こんなことで、こんなことで俺たちの愛は壊れちまうのかよ！」
「はっ」
心底。
心底嘲笑う霊幻が、ゾクっとするほど美しかった。
「お客様──」
ぷに、と霊幻の綺麗な爪が薄い桃色の唇をたゆませる。
「まさか信じたのですか──私が貴方を愛しているなどと？」
かたかたと糞客が震え出す。
「さぁ、分かったらお帰りください。これ以上は営業妨害で警察を──ぐっ！？」
一瞬だった。
ソファーに座っていた糞客が、向かいに座っていた霊幻に飛びかかる。
ソファーは倒れ、衝撃に息が止まった霊幻は、糞客の手を止められなかった。
「が……はっ……！」
糞客の指が、白い霊幻の首筋を締め上げる。
しまっ……！
俺様は身体付きでこなかったことを激しく後悔した。
「愛してるよ、新隆……！これで君は、俺のものだ……！」
取り敢えず、その辺の本でもポルターガイストで、こいつにぶつけて……！
「ぐぁっ！」
と、思ってたら。
霊幻の膝が、糞客の股間に思いっきりキまる。
そのまま巴投げの要領で、霊幻は糞客を壁に叩きつけた。

「……っげほげほげほ！」
あ、どうする、どうする！？とにかく霊幻の身の安全が先だ！
「おい大丈夫か霊幻！」
「……あいつ……警察に……いや、ケツモチに……げほげほっ！」
そうだ、警察……！
ばっと振り返ったら、もう逃げられた後で。
俺様は激しく後悔した。
「すまん霊幻、逃げられた！」
「いいよ……あとはケツモチがなんとか……けほっ……」
よろよろと立ち上がった霊幻は、自分のロッカーから大ぶりな付け襟を取り出した。絞められた痕を隠すためだ。
「そんなの気にしてる場合かよ……！まずは病院だろ！」
「病院は後で行くよ……もうすぐモブが来る。バレねぇようにしねぇと……」
かた、と。
霊幻の左手が震える。
「あ、れ？」
かたかたかたかた。
慌てて霊幻が右手で押さえても、震えは止まるどころか増すばかりだ。
「なん、だ、これ」
ぱたぱたと霊幻の目から涙が落ちる。ストレス反応だ。
「殺されかかったんだぞ。そりゃ怖くて当然だ」
「そっか、俺、殺され──」

がちゃ。

相談所の扉が開いて、霊幻の震えがピタっと止まった。
ぐいっと涙をぬぐう。
「よう、モブ」
『いつもの師匠』に戻って笑いかける霊幻に、俺様は魂が震える。
なんって面白いんだ、こいつ……！
「師匠、なんですか、その付け襟」

「おお、威厳が増すだろ？」
「いや５割り増しでうさんくさいです」
とにかく、シゲオが来たなら霊幻の身の安全はまず大丈夫だ。俺様はさっきの糞客を探すために相談所を飛び出した。
と。
相談所のすぐ下で、ケツモチのマサと何人かのチンピラがバタバタしてるのが見えた。うーん、アイツらからの情報も欲しいな。
俺様はまたいつもの元守衛の身体を借りて、マサに声をかけた。
「よお、マサ。さっき霊幻が客に殺されかけてたが、お前らどういう了見だ？」
「エクボさん！毎度どうも……って、やっぱりアイツですか……！この辺で見かけたって聞いたんで、嫌な予感がして駆け付けたんですが、遅かったか……！」
「霊幻が自衛しなきゃどうなってたか……」
「エクボさんも霊幻さんから相談されてたんですね……ストーカーのこと」
んん？
「盗撮されたりドアノブに精液塗りたくられてたり、ここ数日霊幻さん参ってましたもんね……」
「いや、初耳だが」
「あ、そーなんスか？とにかくエクボさんも野郎を見つけたら俺たちに連絡ください。頭の回るヤツでしてね、なかなか捕まえられなくて」
マサから連絡先のメモを貰う。
……ん？もしかして俺様、ヤクザの人殺しに手を貸しそうになってる……？
勘弁してくれよ！糞客は普通に警察に自首させるっての！！俺様はクリーンな悪霊だ！！
「じゃあ、相談所の周りあんまりウロウロしてると霊幻さんに俺ら怒られちゃうんで、これで」
慌ただしくヤクザが引き上げていく。
しかし、ストーカーだと……？
相談所に戻ると、丁度霊幻が締め作業をしていた。これからシゲオ

とラーメンだとか。
「……俺様もついていく」
「エクボは自分で払えよー？大人なんだから」
霊幻の軽口にシゲオがムッとする。どうも最近霊幻からの子供扱いが不満らしい。でもラーメンは奢ってもらいたい。複雑な心境らしかった。
「わぁってるよ」
今日は俺様、だいぶポカやらかしたしな……。

「ごっそさん」
結局霊幻は俺の分まで奢ってくれた。所長として従業員をねぎらいたいのだ。俺はそれにはありがたく甘えておくことにした。
「俺、今日は呑んで帰るから」
「……師匠と？」
「そう」
「……そう」
シゲオは不満そうだ。うーん、思春期って扱いづれえなあ。
「は？お前そういうことは先に言っとけよ！飲みに行くなら餃子まで頼まなかったのに……モブ、大人になったら一緒に行こうな」
にっと笑ってシゲオの頭を撫でる霊幻。
「……はい」
無償の高価な愛を貰って嬉しそうにするシゲオに、やっぱり俺はムカムカしてしまった。

「で、どこに飲み行く？久しぶりだなぁ、エクボと飲むの」
少し嬉しそうな霊幻に流されそうになるが、俺は真剣な顔を作って、ぐいっと霊幻の目元を──隈隠しのコンシーラーをぬぐい取った。
「！何す──」
「ストーカーに付き纏われてんの、何日目だ？」
「……！」
「マサにきいた。案の定寝れてないみてぇだな」
「マサさんめ」

霊幻は吐き捨てる。
「１週間ぐらい前に、出禁にした客から鬼電されて……で、着信拒否したら、嫌がらせが始まったんだよ」
「何で俺たちに言わなかったんだよ……！芹沢やシゲオが動きゃあ殺人未遂にまでならなかったろうに……！」
「……言えるわきゃねーだろ。裏メニュー関連の揉め事だぞ」
……そうだった、コイツは裏メニュー関連のことを相談所のメンツには言えないんだった。
……俺様を除いては。
ここ数日相談所に顔を出さなかったことを、俺は激しく後悔した。
せっかくコイツの弱みを握れるチャンスだったのに……！
いやまて。まだ挽回できるはず。
「とにかく、今日は俺様がついていてやるから、ぐっすり眠るんだ。家帰るぞ」
「いやいいよ……悪いし……あ、あれ？」
また霊幻に震えが出てきた。
「言わんこっちゃねぇ。ほら、家に帰るぞ」
「アパートは……ちょっと、怖い……」
「あ？じゃあラブホ泊まるか？」
「……そんな贅沢してられな」
「あーもううっせーな！！」
俺は恐慌状態で支離滅裂になっている霊幻に札束を押し付ける。
たぶん５０万くらいあるはずだ。
「今からラブホだ！マサ呼べ！！」
「……分かっ、た」
いつもの駅で、マサと合流してラブホに向かう。
「ストーカーを処分できたら教えてくれ」
「！すんません……その間霊幻さんをよろしくお願いします」
「任せとけ」
「組の持ち物のラブホなんで、ストーカーもそう簡単には侵入はできないっす。安心してくださいね、霊幻さん」
「……ああ」
既に霊幻はウトウトしている。マサと俺、事情を知っている味方に

挟まれて、安心しちまったんだろう。
ラブホのフロントに声をかけて、部屋に向かう。
「準備……してくるな……」
「いやもういいから寝てろ」
「でも……」
「あ〜〜っ分かった分かった！早くしろ！」
霊幻は鞄を持ってトイレに向かう。俺はその隙に風呂を溜め、トイレから出てきた霊幻を問答無用で風呂に放り込んだ。
「じゃあ……フェラするな……」
「いやいい。いいから布団に入れ」
「？分かった」
「俺がいいって言うまで目を瞑ってろ」
「？……寝ちまうよ、そんな命令されたら」
「いいよ、寝とけ。今晩は俺様が見張りしてやるから」
「いやダメだろ……金貰ってるし……」
「……じゃあアレだ。睡姦プレイだ。お前が寝入ったら俺が襲う。ちゃんと起こすから襲われ受けしてくれ。だからまず寝ろ」
「……そうかぁ、プレイかぁ……なら、仕方ねーなぁ……」
ようやく、寝やがった……。
すぐに本格的な眠りに入る霊幻。
……この寝入り方からして、おそらく、３日は寝ていない。
──何してんだよ、ケツモチは。
ケツモチ連中はプロの護衛じゃねぇ。だからある程度は仕方ないにしても、ここまで霊幻が追い詰められるまで手を打てなかったのにはガッカリした。
──任せてられねぇな。
俺様はそうひとりごちて、懐からタバコ……じゃなくて、文庫本を取り出した。暇つぶし用に昨日買った物だ。タバコはキスの味が落ちるって霊幻に言われて、辞めたばっかりだ。しかし、朝まで警戒しておくんなら、どうせなら２冊買えば良かった。
そうしてラブホには、霊幻の寝息と、俺が本のページをめくる音だけが響いていた。

※

「……っ今何時だ！？」
「８時だ」
飛び起きた霊幻がバタバタと身支度を始める。
「ばかやろう何で起こさなかった！？」
「そんなのは俺様の勝手だろう」
「……っ、３秒でヌいてやるから、ちんこ出せ！」
「やめとけやめとけ。精液くせぇ口で相談所に行くつもりかぁ？」
「……ああもう！この借りは！ぜってぇ返す！から！な！」
俺様は笑いながらラブホの精算をする。はは、こいつはいい楽しみができた。
マサに途中までいつも通り送って貰って、それから霊幻と一緒に相談所に向かう。相談所で芹沢の顔を見て……俺様の緊張の糸が切れた。
「芹沢……ちょっと、霊幻を、頼む、な」
「？ああ、分かったよ」
一瞬不安そうな顔をする霊幻。
「すぐ戻る」
はは、可愛い顔、相談所でしてんじゃねーよ。ただ、肉体が限界なだけ、だ。
元守衛の身体を布団に突っ込んで、霊体のまま相談所にすっ飛んで帰る。
「戻ったぞ！」
「……エクボ」
霊幻が俺様を見てホッとした顔をして、あからさまに芹沢がムッとした。これまで霊幻が俺にそんな顔をした事が無かったからだろう。
ふん。見てろよ。このチャンスに、少しずつ霊幻の中の勢力図を書き換えてやる。

※※※※※

「まいどありがとう〜ございますぅ〜」
物凄く嫌そうな顔をしながら霊幻が俺に愛想笑いをする。３日と置かずにＣコースを頼んでたら、こんな顔をするようになった。
「……スマイル一つ頼むわ」
「一つ千円ですぅ〜」
「ん」
千円札を握らせる。
「……」
少しため息をついた霊幻が顔を伏せる。引っ込みがつかなくなったか？
「……会えて嬉しいよ、えくぼ」
が。
花まで香りそうな、とろけそうな百点満点の優しい笑みの顔が上がってきて、度肝を抜かれた。
え？これ千円なの？安い！
「も、もう一回」
「馬鹿、冗談だよ。コース代に入ってる」
俺がもう１枚千円を出そうとしたら、するりと手を絡めながら困ったように霊幻が笑う。そっと俺の袖口に千円札を返してきた。
「エクボさん。悪いけど、今日は気を付けて遊んでください。ストーカーが何処にいるやら、捕まえ損ねてて……」
「チッ！……分かってんよ」
俺の舌打ちにマサがビクリと肩を揺らす。悪霊の呪いがこもっちまった舌打ちは効いたようだ。もっとしっかりしやがれ。
「霊幻、ストーカー野郎とのデートコースは覚えてるか？」
「……多分？」
「よし、それを再現するぞ。誘き出し捜査だ。あの嫉妬深さなら、たぶん釣れる」
「えっそんな……エクボの時間なのに」
「ストーカーがうろちょろしてちゃあゆっくりセックスも出来ねぇだろぉ？だーいじょうぶだ。今日でカタ付けてやるから」
「……悪いよ。俺たちの手落ちなのに……」
「ま、今度サービスしてくれや」

「……エクボ」
戸惑った霊幻が俺を見上げる。俺は飛びっきりの甘さを載せて、霊幻を見つめ返した。
「あり、がとな」
ふぃ、と顔を逸らす霊幻。
はは。
いいぞ、霊幻。
あとちょっとだ。
あとちょっとで、楽しい楽しい奈落の崖だ──

※

「俺様ボーリングあんまり好きじゃねぇんだよなぁ」
「まぁまぁ。ボーリング以外にもいろいろあるから」
俺様は霊幻とラウンドワンとかいう施設に来ていた。

結論から言おう。
めちゃくちゃ楽しんでしまった……。
ローラースケートで慌てふためく霊幻を堪能し、トランポリンではしゃぐ霊幻を堪能し、ゲーセンで格ゲー無双をしてドヤ顔をする霊幻を堪能した。俺様は俺様で、ローラースケートで新感覚に酔いしれ、トランポリンの跳躍感が妙にツボり、初めてやる格ゲーに感動したりしていた。……楽しいなぁ。ちくしょう。俺様はどうしても、霊幻との生活がもたらす感動に、悔しさを感じずにはいられなかった。霊幻のくせに、感服だ。
そのあと連れて行ってくれたラーメン屋だって、
「ラーメンってのはスープを味わうものなんだよ」
って蘊蓄たれておきながら、猫舌でスープ飲めねぇでやんの。もう可笑しくて、ひーひー言いながら笑ってしまった。楽しい、楽しい、楽しい、

ホ　　シ　　イ

……。
さて。
ラブホの前。案の定、ソイツはいた。俺は霊幻と先に入って、霊体だけですぐ出てくる。
「あらたか……どうして、あんな男と……あらたか、あらたか」
呪文みてぇに霊幻の名前を言うストーカー男の後頭部に鮮やかにビール瓶をキメ、気絶したところをラブホに連れ込む。霊幻が待ってる部屋に入ったら、めちゃくちゃ驚かれた。そりゃそうか。
「これからコイツに廃人レベルのトラウマ植え付けっから、手伝え」
俺の声でストーカーの口から言ってやると、やっと霊幻は合点がいったようだった。
霊幻に指示して、ラブホの柱にコイツをプレイ用の手錠で後ろ手に拘束し、念のためズボンのベルトで上半身も拘束しておく。
「よし、起こすぞ」
ぴり、と霊力で気付けをほどこしてから、身体を取り替える。いつもの元守衛の身体に入って、ストーカーの目覚めを待つ。
「……っ、ここ、は……？」
ストーカーは、はっと霊幻に焦点を合わせた。
「新隆！助けに来たよ……！」
何言ってるんだコイツ。
「その男に脅されてるんだろう？もう大丈夫だ、俺が助けにきたから……っ！」
スパアアン、と。
俺はストーカー男をハリセンですっぱ叩いた。余りにムカついたので。
「ちげーよ。こいつは俺のオンナだ」
そう言って抱き寄せると、ははーん、と察しのいい霊幻がピンと来た顔で俺にしなだれかかる。
「ねぇ、えくぼ。……キスして？」
極上のトロけた目をして。
「あぁ」
スーツのまま抱き合って、霊幻の口の中をむさぼる。

「んっ……ふぁ、あっ……」
上顎を舌でこすられた霊幻がピクっと長いまつ毛を震わせる。
「やめろ……新隆に触るな……っ」
「触る？触るってのはこう言う事か？」
俺様はストーカーに見せつけるように霊幻のネクタイを外し、シャツをくつろげさせる。
「っあん♡」
乳首を弾いたら、気持ちよさそうに霊幻が喘いだ。
「やめっ……やめてくれよぉっ……」
「えくぼぉ、焦らさないでくれよぉ……」
霊幻はするするとズボンを脱いで、下着もさっと脱いでしまう。
ぽい、と投げた下着が。
上手いこと、ストーカーの頭に乗った。
俺様は吹き出しそうになったのを必死に我慢した。笑かすんじゃねぇよ、ったく。
「ん？まだ柔らかいなぁ」
霊幻が俺の股間を触って言う。いやガチガチですけど。
「口でシてあげるな……？」
まぁ、フェラをストーカーに見せつけたいのだろう。こいつもストーカーにはキレているのだ。
ズボンのボタンを外して。
チャックを、口で食んで、ジ、ジジ、と焦らすように下ろす。
「ん♡おっきぃ……誰かさんの、より」
チラッと霊幻がストーカーを見ながら言う。……ひっでーことすんなぁ、ぎゃははは！
ぶるんと跳ねた俺のチンポを、心底旨そうに霊幻が舐める。霊幻の長い舌がチンポの表面をぬらぬらと這うのがよく見えるのだろう。ストーカーの見開いた目からぼろぼろ涙が溢れて、口からはうめき声が絶えず漏れ出していた。
「おっきくなった♡」
名残惜しそうに霊幻が先端にチュッとキスをする。
そして霊幻はワザとストーカーから見える位置で、後口の上を俺の陰茎でくすぐる。

「やめっ……」
「おら、何遊んでやがる」
ぐっ、と俺が霊幻の細腰を掴んで。
「あっ♡」
ぐぽ、と霊幻の中に俺様が入った。
「ああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
ストーカーの絶叫が耳に心地よい。
「ぁっ……んっ、あぁっ、えくぼぉ、きすして……」
べろべろと恋人じみたキスをしながら、霊幻の腰を掴んで上下する。
「えくぼ、好きぃ……えくぼとのえっち、さいこぉ……っん、
あっ、そこ、イクっ」
霊幻がぴゅるっと精をこぼすのを、悔しそうにうめきながらストーカーが見ている。
……見ろよ！あいつ、鬱勃起でガチガチだ！！くっそ笑えるw
「あらたか……っ、ぅうっ……」
霊幻にガチ恋してるやつの前で霊幻を犯すの、さいっこーに楽しいな！
「……っ霊幻、イクぞ……っ」
「えくぼっ、ナカに、ナカに出してぇ……っ！えくぼの赤ちゃん、
俺に産ませて……ぇっ」
はは、何産むつもりだよ、お前。悪霊のせーえきでさぁ。
「……いいぜ、孕ませてやるよ」
ぐっ、と腰を押し付けて。
「あぁっ……！」
くん、と甘イキに顎を逸らした霊幻に精を注ぎ込む。
どくどくと注ぎ終わった性器をぬぽんっと抜いてやると、穴からタラタラと白濁が脚を伝って溢れ垂れる。
「あ…あ…」
それを見てもはや言葉にならないストーカー野郎。
「えくぼぉ……愛してる」
満たされた顔をして俺に頬擦りする霊幻。うーん、俺様にもガツン

とダメージがあって幸せだ。
「どれぐらい？」
「え……？」
「アイツの何倍、俺様のこと、愛してる？」
指差されたストーカー野郎が恐怖に震える。
「……誰だっけ……？」
絶頂の余韻にふわふわしている霊幻にそう言われて、とうとうストーカー男が壊れた。
「ふふふ……へへへ……」
ぶつぶつと呟くように笑い出して止まらなくなった。
「よし、もういいだろ。アイツ捨てて来るわ」
「……大丈夫なのか？」
「まあ、任せておけって。お前は風呂でも入ってろ」
俺様は心身喪失状態になったストーカー男にまた憑依する。
ラブホの部屋から出させて、意識を半覚醒させて、ストーカー男のアパートに案内させる。
案の定、アパートの中には霊幻の写真がビッシリ、盗んだ霊幻の下着やハシ、歯ブラシ何かが大事そうに飾られている。
俺は写真以外の目についた霊幻の私物を全部ゴミ箱に放り込んで火をつける。燃え切らないだろうが、コレクションとしての価値は少なくともガタ落ちだろう。
こんなの持って帰ってこられても、霊幻も気持ち悪いだけだろうし、これでいい。
チャリ、と棚の上に隠されていたどこかの合鍵が手に当たる。迷わずその辺にあったニッパーで捻じ切る。ちんこも捻じ切ってやろうか、この野郎。勝手に霊幻の部屋の合鍵なんて作りやがって、気持ち悪ぃ。
さてと、後は内職だ。
俺様は黒いペンのフタをキュポンと外して、片っ端から霊幻の写真に霊障を施してやっていく。こりゃーお祓い大変だぞ、はは。
目を覚ましたストーカー男がまず目にするのは、

「ひぃっ！」

一面の『手を引け』。
遠くにパトカーのサイレンを聞きながら。

※※※※※

あれから、パッタリとストーカー行為は無くなったらしい。
なのに、霊幻は塞ぎ込んでいる。
「……もう、辞めようと思って」
俺と２人きりの相談所で、ポツリと霊幻がこぼす。
「何をだよ」
「裏稼業だよ。命の危険を冒してまでやる仕事じゃない」
「……足抜け、手伝ってやろうか？」
霊幻の目が驚きと期待に広がっていく。
「……いいのか？」
「ああ。今回みたいに俺様にしか出来ねえカラメテもある。俺様と組んだ方がいいぜ？」
「なんで……助けてくれるんだ」
そうかそうか、訊きたがりめ。後悔するなよ。
「俺ぁとっくに、お前さんに惚れてるからだよ」
聞いておきながら、戸惑ったように霊幻は目を伏せる。
「ごめん、俺……」
「あー、いい。俺を利用しとけ」
「……いいのか？」
「取り敢えず俺様をそういう意味で意識するだろ？なら、まずはそれでいい」
そう。優しい霊幻所長の罪悪感をちくちく刺激して。
「エクボ……」
ゆっくりエスコートしてやんよ。
悪霊の手のひらにようこそ、所長──

続